自然生態園では

●インタープリターボランティアがお待ちしています

ガイドウォーク 土 日 祝
12～2月は日・祝

午前の部／10:30～12:00
午後の部／13:30～15:00
展示館にて30分前より受付け（無料）

里山の自然のしくみ、人と自然の関わり・つながり、歴史など、生態園の魅力を、季節ごとのテーマにそって、楽しく解説します。

団体向けプログラム
遠足、環境教育、研修など学校や団体利用にも対応いたします。2週間前までにお申し込みください。

里山のくらし冬～春編

エネルギー革命以後、日本人の自然とのつきあい方、農業とのかかわり方が変わってしまった。山や川を生活から遊離してしまいました。私たちを取り巻く環境は、激変してしまったのです。それまで私たちと共に暮らしてきた里山の生きものたちは、これに適応できず、滅の道を選ばざるを得なくなった。かつての農村環境は、本当の自然ではなく、日本人が作った身近な生きものたちの住処だったのです。農耕に伴う自然への手入れといったものが、知らず知らずのうちに様々な環境を作り、多くの生きものを養ってきたというわけです。

現在、日本の絶滅危惧種の約5割がこの里山の環境に依存しています。定期的な農作業が行われなくなった今、このような環境を復元したとしても当時と同じような作業をしなくては維持していけません。つまり、定期的な草刈りや落ち葉かきといった人の働きかけがないと※生態遷移によって、常緑樹主体の貧弱な生態系へと移り変わってしまうのです。小川やため池の泥さらえ、農道や畦の年数回の草刈り、雑木林の毎年の落ち葉かきや下草刈り、定期的な伐採。これら一昔前の有機的な農作業は、安定した単調な自然に向かうのを押しとどめ、足踏みをさせています。そのことが、生きものにとってほどよい刺激になり、生態系のバランスが保たれていた。里山が活用されていた時代は自然との共生が成り立っていたということです。

自然生態園では、当時の農民に代わって職員やボランティアがこれらに当たり、当時の環境を維持しています。

※生態遷移とは、生きものたちが時間の変化とともに、その成り立ちや仕組みが移り変わっていくみちすじのことをいう。例えば、植生では、裸地→一二年草→多年草→低木林→陽性高木林（落葉樹）→陰性高木林（常緑樹）＝極相へと移り変わっていく。

みんなの公園・みんなの自然

●動植物の採取は禁止です
貴重な生態系を守るために、生きものを傷つけたり園外へ持ち出したりしないようにお願いします。

●園路からはずれないで下さい
石垣や田んぼの畦に入りこむと、足もとが崩れて危険です。また、そのような場所にもたくさんの生き物が住んでいます。決められた園路を歩きましょう。

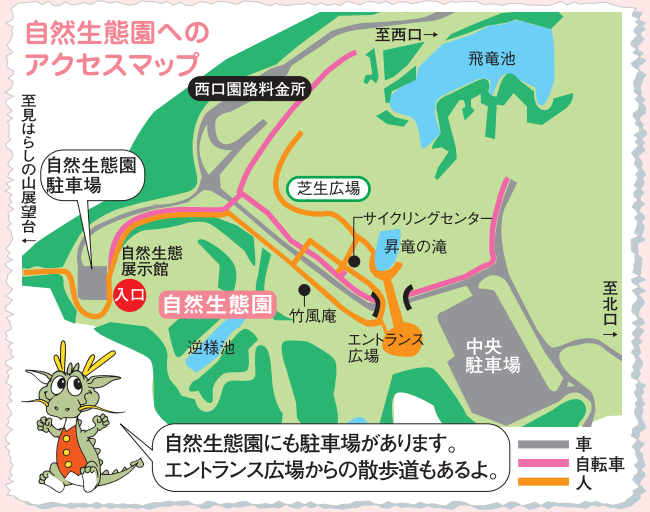
●ゴミはゴミ箱へ
ゴミは決められたゴミ箱へ。できれば持ち帰りましょう。

●自然生態園内は禁煙です
喫煙所は、生態園入り口の一ヶ所です。禁煙にご協力下さい。

●自然生態園への出入り口は一ヶ所です
自然生態園の出入り口は、展示館の案内所だけです。通り抜けはできませんので、ご了承下さい。

●ペットの同伴はご遠慮下さい
生態系への配慮のため、ペット同伴の入園はご遠慮下さい。

◆自然生態園の利用に関するご意見、お問い合わせ◆
〒766-0023 香川県仲多度郡まんのう町吉野4243-12
TEL(0877)79-1807　FAX(0877)79-1704



2008.3.3000
再生紙を使用しています。
PRINTED WITH SOY INK
本紙は、大豆油インキで印刷しています。

自然生態園 冬▶春 イラストマップ

逆様池

ヤブコウジ

カスミサンショウウオの卵塊

国土交通省
国営讃岐まんのう公園

里山のくらし

●里山とは？

里の山と書いて「さとやま」と読みます。1960年ごろ京都大学農学部の先生が考案した造語です。農山村の人たちが薪などを採りに日常的に出入りしていた山、「山里」をひっくり返して「里山」と呼んだのが始まりです。人里という言葉があるように「里」は、人家が集まり、人が生活をしている場所です。

●里山の環境

里山とは人家を取り囲むごく身近な自然なのです。そこで生活する人・屋敷・雑木林・竹林・谷戸田・畑・農道・小川・ため池などで構成され、それぞれがひとつながりになった環境です。

周囲の森は、人里から遠く離れた深山にある原始の森ではありません。また、天然記念物に指定されているような、珍しい生きものが住んでいるわけでもありません。しかし、里山には、さまざまな生きものがいて、自然環境がとても変化に富んでいます。里山の環境は、そこに住む人々が長い年月をかけて、代々農業を営むうちにできあがったものです。

●人と自然の共存

では、人の手が加わっているのになぜ豊かな自然が保たれているのでしょう?現在、日本だけでなく世界中から豊かな自然がどんどんなくなっています。

この「豊かな自然」とは、いったいどんな自然をいうのでしょう?それは、どのようにしたら、次の世代に残していけるのでしょう?今日は、そんなことを考えながら…地質と水が魔法をかけた自然環境を存分にお楽しみ下さい。

里山の動物たち

寒く、食べ物も少ない冬を、動物たちはさまざまな工夫で乗りきります。

●じっとしている動物たち

昆虫たちは卵や幼虫、さなぎ、成虫など、種類によってちがう形で冬越しをします。ほとんどは物かげにかくれているのですが、あたたかい日には開けた場所でキタテハやフユシャクなどのチョウやガの成虫が日光浴をしていることもあります。

メダカやドジョウ、トンボのヤゴなど、水中の生きものたちは、底の泥の中にもぐりこんでじっとしているものが多いようですが、ホソミオツネントンボのように成虫で冬越しをするものもいます。土の中や落ち葉の下ではカエルやヘビたちが冬眠しています。

●元気な動物たち

ジョウビタキ

野鳥たちは、冬でも元気です。北の国から渡ってきたルリビタキやミヤマホオジロ、ジョウビタキなどが木から木へ移り、ツグミやシロハラが地面の落ち葉をかき分けてエサをさがしています。リスやノネズミたちも、秋にたくわえたドングリを食べながら、元気に冬をすごします。「カサコソ」と音が聞こえませんか。

●春が近づくと・・・

目覚めるのがカスミサンショウウオやアカガエルたち。まだ寒いうちに、繁殖のために水辺に集まります。

ニホンアカガエルの卵塊

谷あいの湿地ではニホンアカガエル。ため池ではヤマアカガエルが産卵し、オタマジャクシが泳ぎだすころ、自然生態園は春をむかえます。

里山の植物たち

気候が温暖な香川でも、植物にとって冬は厳しい季節です。冬の間植物たちは様々な仕組みで、寒さを乗りきる工夫をしています。

●種子で冬を越す

風にとばされ、誰かにくっつき、転がり、動物に食べられたりと、様々な方法で運ばれた種子が、春に芽を出します。

フユイチゴの実

●地面に張り付いて冬を越す

霜の降りたタンポポ

バラの花（ロゼット）の形に、平たく葉を広げ、寒風をさけ、陽光を精一杯受けとめながら、春を待っています。

●葉を落として冬を越す

赤や黄に染めた葉を落とし、冬芽(夏から準備を始めています）の姿で仮眠しながら、暖かい春が来るのを待っています。

オンツツジの冬芽

●寒さに負けず冬を越す

ハンノキの花

ハンノキは冬に花を咲かせます。細い葉の針葉樹、厚い葉の照葉樹、冬も葉を落とさない木もあります。寒さに負けず冬を過ごしています。

●冬でも元気

スイセンやヒガンバナのように、冬に葉を茂らせ、栄養をたくわえ夏には休眠してしまう、寒さに強い植物もあります。

スイセン

●地中に潜って冬を越す

地下茎、根、球根、地面の下は寒さの影響も緩やか、姿を隠し春までゆっくり休んでいます。

何かが発見できるかも知れません、ちょっと探してみませんか。

植物名 で記された植物はかぶれますので、ご注意ください。

自然生態園 イラストマップ

冬▶春

※ここに見られるのは、12月～3月の生きものです。
※マップ・イラストは原寸の縮小ではありません。
※開花時期は過去の観察記録を基にしております。
　生きものですので、気候によってはこの時期に観察できるとは限りません。